

戦艦『大和』 1941-1945

志村 良知

ことし4月7日で戦艦『大和』は海没後80年を迎えた。レイテでの大敗で艦隊を組む僚艦を失い、孤独の半年の末単独出撃しての最期だった。

帝國海軍は世界に先駆けて空母機動部隊を編成して実戦投入した（真珠湾）。また、航空護衛無しの戦艦は航空機の敵ではないことを示した（マレー沖）。すなわち、大和の就役と同時に、海戦は戦艦同士の撃ち合いではなく、水平線の彼方から飛来する航空機による雷・爆撃が主力であることを帝國海軍自ら証明した。

大和級戦艦の前任は1920年就役の長門級である。その間の20年間は海軍軍縮時代で、帝國海軍は戦艦の船体を条約適用外の空母用に転用、あるいは新設計空母の建造に励んでいた。戦艦競争が再開、大和級が建造されたが、それは長門級の大艦巨砲化で高速化は図られなかった。

期せずして、太平洋の戦場は戦闘時には航空機の発艦の為に30ノット以上の高速で航行する空母同士の戦いになった。空母は航空攻撃にはきわめて弱いので護衛戦闘機の直衛と、強力な対空火器を持つ艦船の近接護衛が必要である。この任務には戦艦が最適であるが、痛恨にも15万馬力で最高速度28ノットの大和は戦闘中の空母に随伴できなかった。

アメリカの新鋭戦艦アイオワ級は、大和より1万5千トン軽かったが、20万馬力と大和より5万馬力高出力で、6ノット余り優速だった。戦艦同士が撃ち合うのであれば個々の艦の砲力はいらない。アイオワ級戦艦4隻は、各種口径の火器を組み合わせた対空防衛システムを備えて1対1で主力空母に随伴、近接護衛で空母を守る最後の砦となった。これはこういう事態を予測したわけではなく、戦艦の高速化というコンセプトが偶々当たったのだと言われている。

15万馬力で46センチ砲9門を選んでしまった大和は遥か後方で空母機動部隊の戦闘報告に一喜一憂するだけだった。神風特攻という『外道の戦術』を生んだレイテ沖海戦では主砲を斉射したというが、当たったという記録はない。

(10 Apr 2025)